
ゼロの使い魔と、癒しの転生者。

野菜探偵山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔と、癒しの転生者。

【Nコード】

N4133V

【作者名】

野菜探偵山

【あらすじ】

ただの一般家庭で過ごす、ただの高校生が、よくある？神様気まぐれで、ゼロの使い魔の世界に転生することになった。ちゃった。

で？

えっと、かなりキャラが崩壊すると思います。えっと、苦手な方はとりあえず戻るを押しましよう。

オリ主は転生することにしたようだ（前書き）

はじめましてです。

読みにくいかもしれません。自分には文才もないので、つまらない
かもしれませんが読んで頂けたら嬉しいです

に・・・二話から本編になれるかなと思います。

オリ主は転生することにしたようだ

何処に居ても、何処に行っても、どれだけ足掻いても、独り。

変わらない、変えられない。俺に居場所はないのか？

さて、そんなことはどうでもいいから今のところは頭の片隅にでも突っ込んで。

「あはははははは。」

俺の目の前には、本。まあ面白いから笑ったわけだが。何処か、虚しい。

「吟ぐ、ご飯だよ。」

いつもの母の声。

「は〜い。」

しおりを挟み、飯を食べ、風呂に入り、歯を磨き、寝る。いつもの流れ。

「つまんね。」

今日も同じ、瞼を閉じて眠りにつく。

『おい、いい加減に起きろ。』

誰だよ、俺がせつかく寝てるんだ。夢は俺の少ない居場所。だれにも渡さねえ。

『……思ってたより酷いな。まあいい。俺の願いを聞け、そして俺もお前の望みを聞いてやる』

おお、なんかイイ話だな。乗ったぜ、で？お前の願いつて？

『それはだな……ムフフ。』

なに笑ってんだ？

『お前に転生をしてみよう！』

は？

『いや、神様だし、一度は言ってみたかったんだよね。』

じゃあ、お前の願いはかなったんだから俺の願いw『あ、君が転生し終わったら、願いをかなえてあげよう。』

・・・分った、ついでに俺の願いはチート能力だ。

『おお！！本当に？うん、俺のことを気遣ってくれたのか、ありがとう。俺も一度でもいいから与えてみたかった。』

そうですか、じゃ、とつとと転生よろしく。

『うんうん、俺としてもうれしいね。あ、自己紹介しようか、俺はヤハウエ。創造する人によって姿は変わるんだけどね、君は神様が存在しないと思っっているみたいだから、君には何も見えないだろう。』

へへ、そっか、まあいいや、俺は『あ、知ってるよ。渡辺 吟ぎんでしよ？』

・・・俺に何も言わせないんだな。

『まあ、この場において俺は「絶対」だからね。んじゃ、また会えたら。』

ああ、また会えたら。

久しぶりにいい夢が見れそうだ。

『そうそう、君の孤独が消えることを、願ってるよ？』

そんな神の声は吟に届かなかった。

『さて、どうするか・・・そうだ！！あの貴族社会に突っ込もう。』

うんうん、後継ぎだから、仕方なくという理由で可愛がられる家庭に送ろう!!・・・あ、ちょうど能力も思いついた。そうだな、真能力も用意しよう。これは本当の愛を君が知ったときに目覚める。うん、いいな。なかなかいい。我ながらいい考えだ。じゃあ、君が、愛を知ったときにまた会おう。』

もちろん、そんな言葉は、吟に届かなかった。

「おお、お子さんは男の子ようでした。」

「そうか、これで我が家も安泰だ。」

彼の父は、彼をどうやって使うかを考えていた。

オリ主は転生することにしたようだ(後書き)

えっと、まだ転生してないですね。これから転生して、オリ主が頑張ってくれると思うな。

そんでプロローグはここまでだ!!

次回は転生後だぜ!!

では、次話でお会いしましょう。

あと、更新は遅いです。1話1話が短いのに遅い・・・予定です。

ただの馬鹿ですな。(前書き)

オリ主は、高校生なんで馬鹿、という設定にしてあるはず。

ただの馬鹿ですな。

どれくらい時間が経ったのだろう、意識がないのだが、あるようなそんな感じが続く。たまに音が聞こえる、まるで、部屋の外から声を聞いているような。音がぼやける？表現が分からん。俺ってほんとに馬鹿だな。

どどん眠たくなって……

眠たくなって……

眠たく……

急に目に光が差し込み俺は思わず叫んだ。

「おお！ぎゃ！」（ちょ、眩し！）

「おお、生まれましたな。」

「意外と元気ですね。」

「かわいい子。」

吟には、親と思われる人物と、その周りに居る人たちの言っていることが分からなかった、聞き取れなかった。

するとメイドの一人が俺の『息子』がある部位を見る

「おぎゃー！ぎゃあぎゃあ、おぎゃあー！」（ちよ、そこは俺のシンボルがある所のはず！みせもんじゃねえ！）

俺は下を向いくことができないので息子の状態を確認できない。

「奥様の予想があたりましたね。」

ん？夕飯がどうしたって？

「そう、なんて名前にしようかしら！」

「まだ考えてなかったのですか？」

（なんだ？こいつら、何言ってるやがる。）

俺はおむつを無理やりつけられ（かなりはずかった）部屋を移動させられる。

「おぎゃああ！おぎゃあああー！」（おい！メイド！何処を持っていく！俺の息子に何かあったらどうする！）

何かって何だ？と思いつつながら俺はじたばたしてみよう。

「おぎゃあ。おぎゃあああ。」（ちよ、待って）

「またあとで会いましょうね。」

女性が俺に向かって手を振る。

「元気ですね。ジオ様は結構、静かだったけど」

俺が抜けだそうとするのをメイドが必死に、そして怪我させないよ
うに抑える。

「そうでしたな。」

「ぎゃああー！」（目が慣れてきた）

誰かが、俺のことをメイドからひったくる。

「この子が。」

目の前には、渋い？まあそんな感じのイケメソが俺の顔を覗き込んでいた。

「おぎゃあ。」（へへ、こいつが父か、なかなかの顔だ。これはイケメンになるかも。）

しかし、親をもっと見たかったのだが、睡魔に負けて

「あ。。。」

そして、俺は再び寝た。

「寝ちゃったね、あなた。」

「ああ、この子の名前は……ラルナにしようー！」

「変わってるけどいい名前ね。」

「ああ、なんだか、この名前じゃないといけない気がしたのだよ。」

名前は決まったが、ギン、いや、ラルナはそんなことを知らない。

ただの馬鹿ですな。(後書き)

はい、赤ちゃんって生まれた時どうなんだろう、あと、勘違いする
ひとがあるので前話のラストに出てきた赤ちゃんですが、これはギ
ン・・・じゃなくてラルナの兄ですね。

設定では一歳年齢が離れている。

名前は、未定ですね。

そして、新しく付けられた名前・・・ぷっ。

では次話で

俺は……まさか！そんなぁ……。（前書き）

オリ主がかわいそう？いやいや、大丈夫。彼は魔法だけじゃない、能力があるんだから！！

誤字脱字があれば教えていただけたら嬉しいです。

ゼロの使い魔の名前の付け方って何がなんなのやら、教えていただけたら嬉しいです。

俺は……まさか！そんなぁ……。

俺の目が覚めてすぐ。

声がした。

『ごめんね。なんかごめん、俺っておつちよこちよいでさ』

声は神のだが、テレパシーでの会話、そんな感じですよ。

『何が？具体的に頼む。』

非常に気になる。

『ん？それを言ったら君が怒るから、話を変えて、能力のことを離そうと思ってるね。』

俺が何に怒るのかな？だが能力を聞かなければ。

『聞いてやろう。』

『君の能力は、他者の外見と能力などをパクル能力……かな？』

『あんまりじゃね？』

『あ、君がやってたゲームとかの主人公や敵になれると思うよ。』

『へ〜。』

『あ、身長は変わらないから。』

『へ〜、某悪魔兄弟の幼児期か・・・みてみたいものだ。』

『それでね、ちゃんとコントロールできるようになると、外見が変わらずにそのまま能力のみを盗むことも、その逆もできる。』

『へ〜。ありがとう。』

『うん、じゃ、またに〜。』

『ああ、また。』

そういや、俺、あいつがどんな姿をしてるのか、考えてなかったな。考えなきゃあいつ、見えないんだよな。

どうせ、赤ちゃんだ。すぐ眠くなったり、まだ歩けないだろう、1歳、2歳になったら歩く訓練をしよう。

「ラルナちゃん、ねんねの時間ですよ？」

俺が生まれてから3年たった。かなり長く感じた、毎日がおなじなんだぜ？耐えられない。

そして、あいつが、神があやまっている訳を知った。

俺は……俺は!!

「はい、おむつかえましようね。」

「あい。」

こいつ……馬鹿にしてんのか？元？キングオブヒーローKOHの力で吹っ飛ばそうか？

そしたら、俺がかっこよくなっちゃうからな。外見変わるし、そしてたらみんなビビるだろうな。

あ、あとこの世界はゼロの使い魔みたいだな。どうやら貴族の家に生まれてこれたらしいのだが、なんて名前だったか忘れたよ。

で、ラルナが俺の名前らしい。全く変わった名前だよな。

あ、俺の息子は消失しました。とったわけじゃありません。生まれた時からありません。

事故じゃないよ。まあ、俺は気にしてない。なぜなら!!姿自由に換えられるしね。しかし、家出するしか、もう残ってないんじゃない……。まあ、魔法を教えてもらうだけ教えられたら、逃亡を考えてます。能力を試そうとー通行になったら、床にめり込んだりと大変だった。

能力って難しい。

幸い、変身は誰にもみられてなかった……と思う!うん、誰にもばれてない。急いで逃げたから。急いで元の姿に戻ったし、みんな

戻った後に来たんだし。

あと、そこそこ喋れるようになった。

「はしめましゅて。」

とか、まだ3歳でうまく発音ができない。兄は、まあ、俺と同じくらい喋るのが、H E T A。
で、今は兄に誘われて二話の散歩中。
しかし、原作組とまったく関係なさそうだね。

ラルナ・ド・ヘイム

それが今の俺の名前。

「らうな。きをちける。」

「はい。おにいちゃま。」

なにこれ、なに？いじめ？俺の精神の耐久がやばいんだけど。そろそろ課金しないと駄目？

たまに兄と庭にある花や、蝶を追いかけたりするのだが、俺は兄がかわいそうでならない。まあ、兄の黒歴史になること間違いないな。妹と蝶を追いかけるなんて、まあ、人によってはいい思い出なんだろうが。あと、兄を見る父上の目だった。それは、前世？いや、俺は死んでないけどこの世界に来たんだが、転生だし、前世だな。その、前世の俺を見る母と親父の目だった。瞳の色は違うが、利用することしか考えてない。まさに、前の俺と同じ立場、だから俺は、兄の居場所になれたらいいと思っていた。

が、心配はいらないらしい。母上は確かに、兄と俺を可愛がって、愛している。母上さえ消えなければ兄には居場所がある。

あと、そろそろ友達が欲しい。来年、杖を買ってもらえるらしい。

楽しみだ。

兄の横に寝っ転がりながら、目を閉じた。

俺は……まさか！そんなぁ……。（後書き）

連続投稿するとか、ほんとに不定期更新ですね。

読みにくかったりしたら教えてください。

あと、実は、作者はゼロの使い魔1、2巻しか読んでません。で、ウィキを頼りに頑張って、自分で書くのもおかしいけど、頑張っています。

おかしいところや時間的に変なところがあれば教えてください。

では次話で

兄の系統（前書き）

兄は一歳年上でしたね

兄の系統

一か月が経ち、兄は杖の契約を済ませていた。多分、今日から訓練だな。

「ラルナ、今日は俺の初めての魔法なんだ。よかったら来いよ。」

「はい、兄様。」

もう、この体に慣れたのかどうなのか、俺も兄もまともに喋れる。俺は元高校生だしな。

兄の後ろをついて行くと、母が兄を待っていた。

「私も見ていい？」

母にきくとニツコリと微笑み。

「いいよ、お兄ちゃんを応援してあげて。」

ここで、笑顔でやだ！！て行ったら兄はどんな顔をするだろう。

「兄様、がんばってー（棒）」

兄は俺の声を聞くと、嬉しそうに笑って「うん！！」と元気に返事をした。

「はい、ラルナも応援してるから、頑張ろうね。早速だけど、杖を出して？」

兄は頷くと杖をポケットから取り出す。

握りやすいワンド。かな？たぶんそうだろう。

兄はコモンマジックをすべて一発で成功させて、系統魔法にトライしていた。

「ウインド！」

そよ風が兄の杖から吹いてくる。

へへ、魔法って結構すごいんだね。

「うん、風もすこし、才能があるけど、一番いいのは火だね。やっぱりお父さんの子だね。」

兄は母にほめられ少し嬉しそうにしている。

（あ、まただ。）

俺の左手がわずかに淡い青色に発光している。

これについてはまだよく分からないが、メイドと遊んでいる時にも光ったりする。

「父上も、父上も火が得意なの？」

兄は父上を好んでいるらしく、父上の話題にすぐ食らいつく。

「そうよ、父さんは火のトライアングルなのよ。」

「俺、父上みたいになる。で、父上みたいねスクウェアになる。」

「そっか頑張るのよ。」

「がんばってね兄さん！」

「うん。」

今度は棒読みにならなかったぞ。いや、なれないことはするもんじやないや。

「そろそろ家に帰りましょうか。」

「うん！」

母上と兄は手をつなぎ家に行こうとするのだが、俺は動かない。

「ラルナ？」

「どうしたんだ？」

「ちょっと、夕陽を見たいから。」

「そっか、先に帰ってるからね？」

母上と兄は、そのまま家に向かった。彼らはここで戻ったことを後悔するのだが、そんなことは置いておき。

「なんだ？この感じ。」

感じたことのない緊張。

何故？

俺を巨大な影が包む。

「ありや、竜だな。」

こうなったら、やるしかないよな？魔法もない、ただの人から変わらなければ、竜なんて倒せない。

「ワイルドに吠えるぜ！！。」

いや、どっかの神様じゃないけど、言ってみたかった。

早速、ハンドレッツ パワーを使用する。

もちろん、ミニ虎 さんに外見は変わっている。

子供とはいっても、百倍は百倍だ。軽くジャンプをすると飛来してくる竜を飛び越える。足が痛いのは言うまでもない。

そのまま体を回転させライーキックのようなポーズをとりながら落下。

俺の意識は竜とぶつかったときに途切れた。

「ラルナー！！ラルナー！！」

ああ、母上や、召使いたちの声が聞こえる。俺は変身を解くと、母の元に駆け寄った。

「ラルナ！心配したのよ！私たちがいた場所に竜が倒れてると思ったら。あなたがいなくなるんだから。」

そりゃ、お前が目を離したのが悪い。と言いたいが。

「ごめんなさい。」

とでも言うておく。そのおかげで、能力で暴れられたのだから。

あと、俺、一か月外出禁止くらいました

兄の系統（後書き）

まずは、今回使用された。能力のこととかですね。

某ヒーローの能力ですが、自分の身体能力をすべて百倍にするそうですね。

恐ろしいです。

兄は火が得意なメイジです。これから強くなってもらいましょう。

おかしいところがあったら注意をお願いします。

では次話でお会いしましょう。

能力について（前書き）

ん、なんか難しかった。

難産？っていうのかな。

能力について

(情報が欲しい。)

俺は壁から壁まで黙って往復し続ける。

(できれば、神と話したい。)

『よんだ?』

(ナイスタイミング。俺の能力についてだけ。)

『ああ、説明不足だね。君が死んでも変身後の姿から戻ったりしない。なんとかマジックをつかっても見破れない。くらいだね。』

だから見つからなかったのか。

『あと、よくsssだと、前世のことがばれるよね?』

(ああ、ばれるな。)

『精霊に頭を覗かせても、君が生まれてからの記憶しか見れないようにしといたよ。』

(あ、ありがとな。そろそろお前の外見もイメージしなきゃだな。)

『ふ〜ん。楽しみにしておこう。』

あ、神消えたか。

そんなことより、退屈ってレベルじゃねえぞ。

暇だ。能力のコントロール、できるようになりたいし、この一カ月は、引き籠りながらすごすとしよう。

あと、なんかパーティーがどうとかで、なんか行くらしい。湖だったかな、そこらへん憶えてない。

貴族が集まるんだとよ。となると、当然原作チームがでてくるんだ。あいつらは、面倒。ジョセフさんとか、死ななかつたら。どうなのかね。サイトが決闘で負けてたら？見てみたい。邪魔してやるう。フヒヒ。

あれ？なんか道間違えたかも。

（一週間後）

ああ、そういやパーティーいつか言ってなかったね。ごめん、今日だ。そして、なんとか湖に来ている。

「ラルナ。遊んできなさい。オホホホ。付き合つのはいいけど、いきなり犯っちゃ駄目よ?」

あんたは子供に何を言っている。

「はい。」

適当に流して、と。偵察だ。貴族のあほ面見に来たぞ。

「ちい姉さま。」

ん？なんか聞こえた？いや、空耳だな。へんな桃色の髪した奴らがくつついてるけど。俺はなんにも知らないよ？

俺は湖に近づく。

「でかい。そして、でかい！」

あと、綺麗だ。精霊がいるんだっけ？いや、あれは、こことは違う、なんとか湖だったような……。

ほんとに、たくさん来てんだな。俺は貰った飲み物を口に含む。

「これ、酒じゃねえか。」

あ、やべ。

キヨロキヨロ

オドオド

「ふう。」

誰も聞いてなかったらしい。

酒なんか飲んだことないし、美味しいのか？これ。

しかし、残して戻すのはちょっと嫌だ。

「っ。」

全部飲み干し、グラスを返す。

やべ、顔熱い。酔った？これ、酔った？

気付いたら、あの桃色姉妹、俺の近くに来てるし。

無視するんだ。今、あの家族に目をつけられるのは、勘弁、仲良くなるのは学院からでお願いしたい。

忍び足で、逃げる、隠れる。

チラッ

あいつら……楽しげに話してやがる。

その桃色姉妹の楽しい時間に、強そうな干渉者が。

「ありゃ、竜だな。」

あれ？デジャブ？だが、あの時より二回り程でかい。

周りを見る。どうやら、俺以外、誰も気づいてないらしい。

「おい！！桃髪のお嬢さん！！危険が危ない！！」

焦ってたんだ。カッコ悪いのは分る。

桃色姉妹がこっちを見る。ついでに、もう返信済みだ。

クスクスと笑い。二人の世界に入る。

「ちよ。何無視してんの!!」

「何? あんた貴族じゃないでしょ? 何でいるの?」

くそっ!! 間に合いそうにない。だが。

「うるせえ! 三下アアアア!」

俺は飛んだ!

そして、飛んだ俺を見て、自分たちの上の生き物に気付いたらしい。

悲鳴を上げて、妹が姉を引っ張って逃げる。姉は心配そうに俺を見ていたが、とりあえず無視。

俺も俺に気付いたようだ。

「グアアアアアアアアア!」

竜の咆哮。

あ、漏らしたかも。

が、そのまま、竜に近づく。俺の股間がナイアガラ。

俺は一通行に化けている。こいつに触れるだけで、こいつを殺せる!

「命を大切にしな。」

竜の顔が俺の間合いに入る。このまま殴れば、片付く。

勝利を確信したとき、竜の口が開いた。

「は？」

食べようとしてる？そんなことしても無駄なのに。

次に感じたものは、熱。

あれ？運動量、熱量の操作じゃ・・・あ、俺ってば、熱の方はなんも考えてなかった。

竜のプレス（ほのお）をよけるため。風の操作で体を飛ばす。

「・・・・・・・・。」

俺、頭悪いし、いつも演算できるわけじゃないから、学園都市の能力は不向きだな。でも反射は便利だが。

「どんなに強力な攻撃でも！！当たらなければ意味がない！徹底的に潰し・・・・・・・・ギアアアアアアアアアアア！」

プレスが俺を襲う。

畜生。

こいつの部屋ムツゴ ウ王国なんだろうな。

「聞ってる？」

仕方なく頷く。

「そっ……か。」

桃髪が倒れる。

「あ……。帰っていいですか。」

帰ってくるのは沈黙。

意識はないな。

『ねえ、ラルナ？ちょっと力を貸すからさ。あの悪魔の腕をもったあの人になって。』

了解。

ネ さんに変身すると、右手が光る。

桃髪の胸に近づけるとさらに強く光る。

「この反応。」

『おお、やっぱり、悪魔に好かれてるね、この娘』

「どつやって直す。」

『うん、病気の種類だから、万能薬でも使えばいいんじゃないの？じゃあね。』

なんで教えてくれないのか。

万能薬ね。なんか、ないかな。

1 魔法少女にでもなる

2 逃げる

3 この世界以外の魔法を考える

1 奇跡も魔法もあるんだよ!!。

2 逃げたら公爵に殺されるから、却下。

3 俺、馬鹿だから、思いつくはずがない。

「ん、ないな。」

なかなか思いつかない。

「あ、あの子なら。」

そんなんで、変身。

魔法少女おり マカのゆまちゃんです。

桃髪に治療魔法を施す。

荒れていた息も安定するし、成功だろう。

「感謝しろよ？」

とりあえず、竜の声を聞いた貴族が来そうだから変身を解き、RU
N A W A Y !

あの夫婦、親ばか、チート、娘のためなら何でもするよんな人だ。
カトレアが倒れてたら、とりあえずキレるな。

「どうあああれだあああああああああああああああ！！！」

ああ、キレてるよあの人。

とりあえず母上の元へ。

「あら、何か騒いでるけど何かあったの？」

母上は湖での騒ぎを見ている。

どうやら、どっかの貴族が何かやったと思ったのだろう。

竜巻で、近くにいた変態しんせは明後日の方向へ飛んでいく。

「分らない！」

俺は笑顔で答えた。

能力について（後書き）

かなりgdgdだった気が、こんな駄二次創作をお気に入りにいれてくれた方、評価してくえた方、ありがとうございます。

兄さん・・・あなたの出番、妹に取られちゃうよ。

じゃあ、次話で。

パーティーにドンパチはつきものです。(前書き)

パーティーの話、前話と今回ですが読んでみてつまらない、書いていてつまらない、本編にも関係しない、ので飛ばしてもいいです。

パーティーにドンパチはつきものです。

俺は、ヴァリエール公爵夫人、『烈風のカリン』と何故か、何故か決闘することになった。

それは、一時間前、母上が「ラルナ、見てきてくれない？オホホホ」なんて言ったせいである。

（一時間前）

母上に言われて、

俺は、あえて一通行に変身し、事件現場へ向かった。

桃髪をみるが、正常に息をしている、汗もかいてない。俺はそばに膝をつき、額に手を置く。

「なんだよ。熱もねえじゃねえか。」

「貴様あー!!」

急に強い風が吹いたと思ったら、2メートルほど吹っ飛ばされた。

「いってえ。おっさん。あんたの娘さんは正常だ。安心しろ。」

どうやら俺を飛ばしたのは烈風のカリンではなかったらしい。

「な、カトリアは気絶してるんだぞ？お前がやったのか!!」

「いや、お前、落ち着け。」

「落ち着いてられるか！！決闘だ！」

このおやじ、話聞いてない。

「馬鹿野郎！！」

俺は怒鳴る。公爵は一瞬ひるむも、すぐこちらを睨み返してきた。

「貴様……わしに向かってなんと言った？」

まるで怒りを抑えるように、無理やり声を抑えているようだ。

「馬鹿野郎って言ったんだよ！お前親なんだろ！そこで倒れてる娘の看病してやれよ！決闘なんてやってる間！！誰がその子を守るってんだ！！」

「ぐぬぬ。」

一步、公爵が下がる。

「お前だろ！！お前が守らないで！誰がその子を守る！」

「あなた。決闘はやめなさい。」

おっ、公爵夫人は分ってるねえ。娘を優先させるなんて、親の鏡だ。うんうん。

「あなたの代わりに、私が彼と戦いましょう。」

親の鏡が杖を抜いた。

〈回想終了〉

てな訳だ。カリィ又夫人……この人の目が語る。久しぶりに暴れられると。目が楽しんでるもん。

「場所を変えますかな？」

「そうしましうか……えー。」

「ん？俺はアクセラ ータってんだよ。」

「そうですね。言っておきますけど、手加減はしませんよ？」

「はいはい。」

カリィ又夫人の後を追っていく。

しばらくすると、開けた場所に出る。

「さあ。楽しませてくださいよ？エア・スピアー！！」

「ちっ。」

俺は急いで横へ跳ぶと、俺の立っていた地面が抉れた。

「……殺す気かあ？」

「ふふふふ。」

こいつ、俺を。

「エア・カッター!!」

「糞!!」

能力を発動して、風の刃を分散させる。

もちろん、力についてはれると厄介なので杖を持ちながらだが。

「あなた、中々つよいんですね。ではこれはどうです？ユビキタス。」

「偏在!？」

カリーヌが4人、いや、8人。

8人のカリーヌが横に広がる。

「包み込む気が・・・無駄なんだよ。」

地面を軽くけり、空に逃げる。一通行はベクトル操作、俺には演算なんてできないから反射や分散にしか使えず。空を飛ぶことなんてできない。

8人のカリーヌが同時に杖を振ると、巨大な竜巻が八つ現れる。

「カッター・トルネード・・・触れれば切れる。」

八つの竜巻は合体し、さらに巨大な竜巻に変わり、俺の体を八つ裂きにするべく体をねじり、俺を空中からたたき落とす。

「痛い。」

竜巻に触れたところが裂け。

「そして、叩きつけられ胸骨を折られたと。」

俺は立ち上がる。けがをしたのは俺が油断していたせい。気を抜けば能力が発動しない。ベクトル操作は便利だが、演算は疲れるし、さっきの欠点もある。つまり、あのロリコンと言われた彼は天才だったってことだ。

「こんなところにいたんですか。」

見つかったか。

「ウインディ・アイシクル。」

何十もの氷の矢が降り注ぐ。しかし、どんなに鋭い氷でも、俺に触れただけで碎ける。

もう杖は使えない。今ので壊れた。

「ウインディ・アイシクル!!!」

ふたたび氷が俺を襲う。

Side K

決闘相手、アクセラレータに氷が襲う。

(勝った。)

そう思ったのに、彼は無傷だった。

「なぜ！なぜ杖がないのにそのような！」

彼は何も装飾品をつけていない。それらの品と契約したわけでもなさそうだ。

「ああ？」

なんかむかつく声で返すアクセラレータ。

「知ってるわ！あなたはさっきの攻撃で、杖を失っているはず！そう、今のあなたにもう魔法はない！さっきまでの力なんて！何処にもないのよ！」

どっかで聞いたことがありそうなセリフ。

「哀れだなあ、お前。本気で言ってんだとしたら、抱きしめなくなっちまうくらい哀れだわ。」

「何を言っているのです！」

アクセラレータは微笑んだ。

「確かに、さっきの攻撃で、杖を完全に破壊された。」

「今はもう魔法なんて使えない。」

「だがなあ、俺が弱くなったところでえ！別にお前が強くなったわけじゃねエだろオがよオ！？。」

「あア！？」

彼が地面を踏みつけると、土の塊が全方位に飛び散り、銃弾のように襲いかかってくる。

「エアースールド！」

風の盾を作りやり過ぎすが、偏在はダメージを負って消えてしまっていた。

次に、彼は、たった一步。たった一步で間合いを一気に詰めてきた。

「悪リイが、こっから先は一方通行だ！！」

彼は拳を握る。飛ばば逃げきれんだろうか……

「大人しく尻尾オ巻きつつ泣いて、無様に元の居場所へ引き返しやがれエ！！」

彼の拳が、エアースールドを破ったのを確認した時、腹に激痛が走り、意識を失った。

S i d e 主人公

勝てた。俺は勝てた。あの烈風に、勝った。

「お疲れね。ラルナ。」

こっちに生まれてきてからずっと聞いてきた声。

「へ？」

間抜けな声が口から洩れる。母上だった。

「オホホホ。分らない？これよこれ。」

母上はポケットからペンダントを取り出す。ペンダントは光りを放ち始めると、俺の指に指輪が出現する。

「これは……。」

「マジックアイテム。お互いの位置が確認できるの。便利でしょ？」

「……確かに。」

俺は変身を解く。

「フフフ。親に隠し事はいけませんよ？」

「しめんなさい。」

「よしよし。」

母上は俺の頭を撫でた。

「母上？」

「なあに？」

「……可愛い子には旅をさせろって言葉。知ってる？」

「……知らないなあ。どんな言葉なの？」

パーチーにドンパチはつきものです。(後書き)

中途半端ですね。

そして、彼が使っている杖ですが、これは、もし人前で戦うことになり、能力を使えば異端扱いされると思い、急いで用意した偽物の杖です。

戦闘描写って難しい。そして盛大にパク・・・ゲフンゲフン。

そんな感じでただ。だらだらと過ごさせるのも悪いので、旅させようかな〜とか思っています。

遅れましたが、読んで頂きありがとうございます。

では次話で会いましょう。

可愛い子には(前書き)

オリ主は前世でも喧嘩なんてしたことのない人でした。だから、戦闘描写がしょぼいのは仕様・・・てことにしといてください。

もっと勉強してまともに書けるようにしたいです。

可愛い子には

（一か月前）

「子供が可愛いと思うなら、親元で甘やかすのではなく、世間の厳しさを教えて旅をさせた方が子供がしっかり育つと言う意味なんだって。」

母の表情が初めて見るものに変わる。

「あなたはどうしたいの？」

母の寂しそうな顔。

「お・・・私は旅がしたい、そして世界のことをもっと知りたい。」

やべ、俺って言いそうに・・・。

「知ってどうするの？」

「考えてなかった。」

「そっか。」

母は俺に袋と杖を押しつける。

「この袋には少しだけお金が入ってる、大切に使いなさい。そして杖・・・契約の仕方は分る？」

だって。目の前にいる盗賊の集団が、ゲルマニアに入ったぞー！！
とか言ってるんだもん。

そして、何かを袋に入れている。暴れてるから生き物なんだろう。
たぶん人攫い。見逃したら、イケないよな。

一応声かけとくか。

「おいてめエら！！」

一人の盗賊が反応する。

「なんだ？この餓鬼。」

「その袋に入ってるのは人間か？」

盗賊たちは笑いながら。

「こいつは人間じゃねえ、人の姿をした化け物だよ。」

「ほう、人を怪物呼ばわりするのか、分った。お前らを5分で倒してやる殺しはしない。そしたら、その袋の中身をおとなく渡せ。

OK？」

「ああ、いいぜ。その代わりに、お前が負けたら、お前もこいつと同じ商品なってもらおう。」

クケケと汚く笑う盗賊たち、うんこれはちょっとOHANASHI
する必要がありそうだ。

「じゃあ行くぜ？」

俺は、ハンドレットパワーを発動させる。

「こいつ！顔が変わりやがった。」

あつ、やべ、今アクセラレータになってたんだ。まあいいや、5分で片づけるし。

とりあえず、近くにいた盗賊に近づいて殴る。

あれ？こんな簡単でいいの？

「こいつ、見えたがまるで霞だ。」

「まままままいった。」

その後次々と降参していく子分たちを見、頭は舌打ちをすると腰から杖を抜いた。

（こいつ、魔法を。）

「フレイムボール！！」

飛んでくる炎の玉を難なくかわす。

「どんな強力な魔法でも、当たらなければ意味がない！気を付けるよ！今日の俺の身体能力！全力全開！計測不能！」

ついでに敬礼。いや〜やりたい放題やれていいな、ほんと。

「糞!!!」

あまりのスピードについて来れない頭は再び詠唱を始めるが。

「遅い!!!」

そう、あまりにも遅すぎた。

俺は頭の懐に入ると、腰を落としてそのまま腹を殴る。内臓つぶれてないといいね。

「く……参った。」

「ああ。殺しはしないと約束したな。」

「ああ、した。」

「あれは嘘だ。」

倒れた頭の頭を蹴っ飛ばす。

「ひ……ひどい。」

手下が目頭を抑えて泣いている。なんだ、俺が袋に入れられている人を助ける姿に感動してるのか。

この涙に免じて、殺すのはやめておこう。

「こんななのってないよ・・・こんなにあんまりだよ！」

黙って袋を担ぎ、ラルナが去って行った後、頭は泣きながら呟いた。

可愛い子には（後書き）

ギャグだけまじめにやってればイイのかな？。

そんなこんなで、ですね。いや、なにがですねなんだろう・・・

では次話で。

パートナーは危険なあの入

とりあえず、だ。袋から危険人物を解放する。

その姿は

「お前……こんな世界で何してる。」

袋から出てきた人物。前世であったことのある……ような、気がしたが気のせいらしい。全く、勘違いさせないでくれたまえ。

「は？何言ってるの？」

「……お前、名前は？」

「え？私？私の名前は、ニフリートですけど。」

ニフリート、やはり俺の知らない人だったようだ。

「あなたは？」

ああ、名乗られたら、ね。

「俺は……アクセラレータ。」

「その間はなんですかー!!」

「気にスンナよ……まあ、助かったんだし。」

俺は改めて、ニフリートを見る。ふむ、服装は、まあ普通〜って感じだ。うん、平民だね。そして、整っている顔。胸の大きさも普通だ。髪色はオレンジ・・・人攫いに駆られてもおおしくない美少女だった。

「あなたは命の恩人！一生ついて行きます！」

なんか騒いでるよ。それにこの子、めっちゃ怖い。何故、この子の笑顔が怖い。俺はとりあえず、虎徹さんの姿から、アクセラレータに変化する。

約一か月の成果なのか、フルオートで反射の演算が可能になった俺である。

「あなた、貴族なの？」

少しおびえてるような、エフリート。こいつ、わざとおびえてるな、油断させて・・・ってお約束のあれだな。

「あア？別にそんなお偉い人たちではねエ。」

ちよつと声真似とかやってみたり、その結果余計にこいつを警戒させてしまったようだ。万が一襲って来れないように、力を見せつけとくか。

「ん？ありゃ、盗賊か？」

俺は森の方を見て言う。

「ここの森には吸血鬼がでるって噂です。」

「……………」

俺は黙る。多分、いや絶対こいつの言ってることは本当だ。つまり、こいつも吸血鬼なかまってことだな。とりあえず、仲間を半殺しにすれば、俺に手を出すよな。

俺は近くにあつた手頃な石ころを気の上に向かって蹴る。あまりにも飛んだ石が速すぎて吸血鬼でもよけられなかつたらしく、落ちてくる。あ、右腕を抑えてるな、石貫通した？それとも刺さってんの？

「貴様、何者だ。」

長年生きているお陰かずいぶん落ち着いていらっしやる。

「人間だけど。お前らは吸血鬼で間違いないな。」

「そうだ。」

男の吸血鬼が頷き、左手でなにやら合図をすると。森の中から何十人？という吸血鬼ができて俺らを囲む。いや、囲まれているのは俺だけだな。

「やっぱり、てめエはこいつらの同族でOK?」

「ふん、今頃気づいたの？抵抗しなければ楽に殺してあ・げ・る。」
ナイフを俺の喉向けるエフリート。

「へエ。じゃあ、お前も含めて、ここにいる格下共はよオ。俺を殺

そうとかおもっちゃってる訳ですかア。でもよオ。いいのかア？俺の二つ名は『最強』、最強のアクセラレータってんだけど。まあ、知るわけないか。」

「お前みたいな餓鬼が何を言う！」

確かに、俺の見た目は4歳児くらい。そう考えても吸血鬼の敵じゃない。しかしそれは、相手が人間だったらだ。反射はギアスとか使うことぐらいでしか破れないだろう。

「それとも逃げたら許してくれるのか？」

「……逃げてもいいが、捕まえて殺すだけだ。」

エフリートは不敵に笑う。

ふん、予想外です。

「そうか、面白いな。お前は最後に殺してやるう。」

俺は自慢の反射で飛び、敵に囲まれるという状況の回避はできたはず。別にほぼ無敵だから気にしなくてもいいんだけど。

流星吸血鬼と言ってあげたいほどの速さで俺を追ってくる吸血鬼たち。

俺が着地すると同時に、地面が割れ、土の塊が辺り一面に飛び散った。

「あははは〜！！」

俺のまわりに群がる吸血鬼の腹を蹴ったり殴ったりと好き放題にや

俺は踏みつけていた吸血鬼の刀を持ちあげ構える。

「その構え!？」

おお、驚いてる驚いてる。

「ふふ・・・俺の正体が聞きたいか？ある時は高校生！ある時はヒロー！そしてある時は魔法使い！しかしその正体は！」

一区切り。

「正体は？」

とエフリート。

「その正体は！伝説のヒーロー『ギン』だったのだ！わははははははは！」

「ぎ・・・ぎん?」

エフリートが顔を歪める。

「そんなわけないでしょ！あんたみたいな餓鬼が！吟の名を使うな
く！」

あ、なんか怒ってる。こいつ、転生者だな。しかも俺の知り合いだしかたがない。言葉で分らないのなら、この手で、分らせてやろう。

どうせ信じてくれなさそうだ。

「そういえば、お前を最後に殺すと約束したな。」

「それがどうかした？」

「あれは嘘だ。」

パートナーは危険なあの人（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

へへ。結構危ないね。もう伏せ字なんてやりません。・・・面倒だし（ボソ）

そして、新たな転生者が！

はい、では次話でお会いしましょう。

刀を振り下ろす。

頭が切れるはずだった。

刀は顔にぶつかった途端に折れた。

「甘いな。俺が戦っていたのを見てただろ？これは学園都市最強の能力だ。」

「がくえんとし？」

どっかで聞いたことがある。いや、転生する前に聞いた。たしか。

「吟がおもしろいと言っていた・・・小説の。」

「おお、思い出してくれたか。」

「ほんとに吟？」

「あたりまえだろ。」

敵は吟だった。

吟は、自分の能力とか、これまでのことを得意げに話してくる。

「ふうん、じゃあ、それ以外の力使ってくれない？私もあんたを殺したりしないから。」

吟の力は、他者になれて、その力をそのまま盗むことができるらしい。

そんなの他のアニメでもいなかった？まあいいや。

「別にいいけど・・・お前誰？」

「分らない？」

「……………まさかだとは思うが。やっぱり、真坂だな。」

……………当たった。

「そう、私は、真坂^{まさか} 真奈^{まな}だけど。じゃあ気を取り直して、勝負！」

Side Out

こいつ、知り合いだった。真坂真奈・・・ある意味で危険人物だ。俺の黒歴史を一番知っている。恐ろしい人間だった。今は吸血鬼か。

俺は虎徹に変化し、早速ハンドレットパワーを使う。

「いくぜ？」

俺は一気に間合いを詰めて、殴ろうとしたが、見えない壁に阻まれ、そのまま後ろに飛ばされる。

「う……………」

息をする度に、苦しくなる。胸骨とかをやられたか？自癒力を高め、一気になお……………せなかったが悪くない。

「な……………」

真奈…………いや、エフリートは、突然倒れる。

「魔法…………スリープクラウド。」

俺は咳く。

俺を無視し、何者かがエフリートを捕まえる。

そして、グリフィンにエフリートを乗せ、何者かも飛び乗る。

「糞……………」

俺は、立つ。

何者かがこっちを見る。その顔を、俺は知っていた。

しかし、男は俺を無視しグリフィンを飛ばす。

「ワアアアルドオオオオ!!」

俺はワルドを殴るために走り出す。

ワルドは、自分の名を呼ばれて驚いていたようだが、また、エア・ハンマーで俺を吹き飛ばす。

「ちっ。」

俺は地面に腕を突っ込みブレーキをかける。腕から変な音が聞こえても気にしない。

アクセラレータになってもいいが、能力がばれたら……もしかして、もつばれてる？いや、俺とエフリートの会話を聞いていたら俺を危険と判断するのは必然。つまりあいつは俺のことを知らない。

「待ちやがれエエエエー!!」

待てと言われて待つ馬鹿ではないワルドは俺を無視し、高度を上げる。

行かせない。俺は地面を蹴り、ジャンプする。

あと、あと少しで、エフリートに届く……のに。

ワルドは俺に気付き、エア・ハンマーを使い。俺をたたき落とした。

落ちて行く。

俺は急いでアクセラレータに変化し、着地する。落下のダメージをすべて逃がしたが。エア・ハンマーで受けた傷は治っていない。

俺は目を閉じた。

強い、しかし無力。(後書き)

何故、人は中途半端に終わらせるのか……。

次話はエフリートを助けに行くのかな？苦勞してゲルマニアに入ったのに。

ワルドの名前って、いかにも何かやらかしそうな。

では次話で

だいたい主人公が外に出ると厄介事を持ってくるので実は家に居てほしい。(前

「サブタイトル長すぎ……。」

「思いつかないし、仕方ないじゃないか。憧れるもんじゃないよ……俺なんて。」

「大丈夫です。探偵さんはもう独りぼっちなんかじゃないです。」

「そうだな……そうなんだよな。」

「へ？」

「本当に？ほんとに一緒に書いてくれるの？そばに居てくれるの？」

「え……無理。」

「参ったな……グス……駄目だな俺って、まだまだちゃんと先輩ぶってないといけないのに、やっぱり俺って駄目な子だ。」

ここまで書いて分かった、関係ない。ほんとすいません。

だいたい主人公が外に出ると厄介事を持つてくるので実は家に居てほしい。

目が覚める……あの男は、ワルド、だったと思う。何故、あの人がエフリートを攫ったのか分らん。あいつは聖地目指してんじゃないの？何故吸血鬼なんて必要なんだ？訳が分らん。体を動かすが痛くない。あつ、俺が倒した吸血鬼たちが起きた。

俺が与えたダメージなんてなかったのかのように吸血鬼たちは立ち上がる。

「あゝ。吸血鬼たち。俺の話を聞け。」

「何？」

一人の吸血鬼が返事をする。他の奴はこっちを睨んでる。何？俺が何したの？そんなことよりだ。

「あゝ、なんか分からないけどエフリートが攫われたぞ。そして俺は何故エフリートが攫われたのかを聞きたい。しかも、トリスティンの騎士隊長様に。」

あれ？あいつって何て名前の騎士隊だっけ？まあいいや。

「まあ、吸血鬼だからな。」

「は？」

間抜けな声が漏れる。

「吸血鬼って理由で攫われたなら、なんでお前たちは無事なんだよ。」

吸血鬼は腕を組み唸りだす。

「うーん。あんたが私たちを殺したのと思ったんじゃないの？」

「そうか、でもあいつって強いんだよな。あつ、俺、烈風のカリンを倒したんだつた。そっか、なんで負けた？そっか、エア・ハンマーをまともに食らって、アーアーって奴か。」

「何をブツブツ言ってるんだ？」

そっか、この若い一（見た目は20代くらい）以外、みんな俺と話そうとしないな。

「ああ、えつとな、あいつは騎士隊の隊長をやってるほど強いんだけど、そんな勘違いするのかな、と思っただけだ。」

「そのことから俺が話そう。」

ん？聞いたことのない声が後ろから……俺は振り返ると、やさしそうなお爺さんが。

「長老様。何故ここに。」

へ？長老？何？

俺がボケっとしてると。みんな爺に頭を下げている。

「あの爺さん？なんでエフリートが攫われたんだ？」

「おう。生意気な餓鬼だのう。それはな、わしらがトリステインで人を襲いすぎてのうゲルマニアに逃げようとしてたところだったからかもしれないのう。多分、仲間を攫って儂らを誘き出し波状攻撃で一気に片をつけるつもりじゃな。」

つまりエフリートたちのせい。いや、こいつらをボコしたのが原因か。

「それに、坊主、さつき烈風のカリンを倒したと言ったのう。」

「ああ。」

何がおかしかったのか爺はフオフオフオと笑いだし。

「絶対、坊主なんかじゃ勝てん。あの人は、一国を一人で落とせるほどの力をもつとるからのう。」

「そんなに強かったのか？」

「おう。今過去形を使ったが、あの人は今、現在進行形で強くなつとる。儂はな、人の強さを見切れるんじやよ。坊主からは不思議な力を感じるが、それがなかったら、そこらの貴族と同じ戦闘能力しかもつとらん。そうじやのう。仲間をボコすことは死に値するのだが、エフリートを取り戻したのなら、許してやろう。」

そんなに強いのか、そして俺は能力がなかったらゴミなのか。じゃあなぜあの時……まさか、本気を出していなかった？否、弱気と言っか、かなり手加減してたんだらう。それなのに俺は、おそろ

しい怪物を、殴ってしまった。ああ、恐ろしい。

「そっか、じゃあ行ってくる。」

俺が立ち上がりワルドが飛んでいった方向へ走ろうとするが。見えない壁に阻まれる。

「まあまで。」

どうやら爺が邪魔をしたらしい。

「そう怖い顔するな。」

顔に出てたか。きっと爺の考えがあるのだろう。俺は爺の前に座る。

「うむ。ヴァリエール領の方からすさまじい怒気を感じたのう。」

へ？土器？いや、怒気か。

「まさか……心の中で怪物と思ったから？」

「どうやらそうらしいのう。今の坊主でも連れ戻せるのだが、ちょっと稽古でもつけてやるうかの。」

この爺、稽古なんて付けられるのか？なんて俺が爺を馬鹿にしているよ。

「坊主よ、俺は爺と呼んでもいい。しかし、いくら爺といっても、やっぱり馬鹿にされるとイラッと来てしまっのう。」

「く……」

爺から何とも言えない何かがあふれだして、俺は訳のわからない恐怖を感じて、頭が真っ白になる。謝らないと、なんかやばい。けど……。

~~~~~

誰かが話している声が聞こえる。どうやら、俺はまだ生きているらしい。死ぬと思ったんだけどね。そして、手で床を引っ掻くと爪に砂が入るのを感じる。どうやら、まだ外にいるらしい。あの爺の声も聞こえる。起きないと……あり？起きれない。そして喋れない。どうなってる？

「おお、坊主が気付いたか。」

目も開けれないが耳は聞こえるようで、爺の足音が聞こえる。そして足音は俺の前で止まり。

「皆で話し合っただが、お前は弱すぎる。おそらく実戦もしたことないだろう考えた。」

話しかけてきた。俺は爺の表情が見えない、まぶたも開けられないからだ。

何故？と言おうと思っても口が開かない。

「理由は簡単。儂がだした殺気と呼ばれる気負け、気絶したからじゃ。」

ああ、あの何かは殺気なのか。

「まあ、僕の殺気を当てられた奴は下手すりゃ死ぬけど。」

この爺。規格外すぎる。

「そしてもちろん、カリンもこの程度の殺気なら出すことができる。」

やっぱり、あの人は手加減してたんだ。

「という訳で、坊主に稽古をつけることにした。」

ああ、ありがと、爺。でもその前に動けない体をどうにかしてくれ。

「ああ、そうじゃった。エフリートとは何やら知り合いみたいだったからのう。心配してるんじゃないだろうが、そんなに気にするな。放り込まれている場所は分つとる。どうやら名前は忘れたけど、どっかの監獄じゃなかったけ？」

何故疑問形だ。

「まあ、あそこには拷問も何もない。もちろん、僕らのような化物たちを抑える何かを使っているのだろうが、あそこではの〜。何も無い、何も無い。飯は出ない、人とは離せない。縛り付けられて動けない。光が差し込んで来ない。などのいろいろと問題点たつぷりなのだが、何、息ができなくなってもあの子なら一カ月以上はもつてくれる。それまでに坊主を鍛えるのじゃ。じゃから、今はゆっくり休んどくことだの。フオフオフオ。」

体は休まないと治らないってことか？なんか眠いしな。

夢の世界に沈んでいくときに「怪物なのは長老だけだよな。」  
「みたいな声が聞こえた気がする。」

そして何かがつぶれた音を聞きながら、夢の世界に落ちた。

だいたい主人公が外に出ると厄介事を持ってくるので実は家に居てほしい。(後

「作者と!」(作者)

「ワルドの!」(ワルド)

「……………」(ワルド)

「……………悪い、ワルド。考えてなかった。」(作者)

「何それ……………」(ワルド)

「では気を取り直して、後書きの時間です!」(作者)

「はい!きましたね。この時間が。」(ワルド)

「そうですね、ワルドさん。まあ今回からはじまったんですけどね。

」(作者)

「読者からの質問コーナー。」(ワルド)

「その前に!作者のコーナー。」(作者)

「なにかあるんですか?」(ワルド)

「あるんですよ悪ド君。やっぱり感想には返信した方がいいんですよね。という訳で、感想を頂いたら返事を送って、意味不明と言われた部分は後書きで、返事をする形でイイよね?」(作者)

「俺に聞いても分かりません。」(ワルド)

「ですよ〜。」(作者)

「はい。作者の邪魔が入りましたが、読者からの質問コ〜ナ〜。」  
(ワルド)

パチパチパチパチ。

「まずは一人目、匿名希望さんから。」(ワルド)

「あれ？匿名希望だっけ？まあいいや、怒られるの怖い。」(作者)

「えっと、まず一つ！ワルド様との接点が意味不明すぎる。」(ワルド)

「はい、意味不明ですよ。あの時ちゃんと後書きで補足でもしておけばよかったと後悔しました。その点は、『エフリートが悪いこととしまくって！貴族でも手に負えない！アホリエッタが悪ドに頼んで！悪ドはエフリートを攫った！』まあそんなかんじです。」(作者)

「……………俺はワルドだ。そして作者よ、お前の後ろにウエールズ様が。」(ワルド)

「え？マジで？あ……………どうもウエールズさん。え？何？確かにアホリエッタ様のことをアホリエッタって呼びましたけど……………え？もしかして怒っていらっしやる？ちょ、何詠唱してるんですか、

ちよつと！アホリエツタ様も一緒に唱えたりして！ちよ、マジやめ・  
・・・アーーーーーー！！」（作者）

「はい、阿保な作者は気にせず、二つ目！

年代が全く分らん・・・らしいです。」（ワルド）

「え？」（作者）

「年代が全く分りません！！！」（ワルド）

「・・・考えてなかった。」（作者）

「は？」（ワルド）

「テヘッ。。」（作者）

イラスト（ワルド）

「ちよ、悪ドさん！何偏在出してるんですか。ちよ、やめ・・・  
アーーーーーー！！！すいません！ワルド様の名前の由来は悪じゃ  
なくてワイルドから来てると思います！ほんとにすいません！そし  
て、読者のみなさんすいせん。」（作者）

「さて、すっきりしたところで三つ目。

状況が分からない。」（ワルド）

「あゝ、それは俺のせいですね、会話だけだと分らない、と分って  
いるはずなのに、会話の間に何を書いたらいいのか分らない。小説

ってむずかしい。やっぱり面白く書ける人って天才ですね。あ、そう言えば、干した洗濯物どうなってるんだろ。」（作者）

「作者が現実逃避を始めましたが、四つ目

烈風に勝ったのにワルドに負けるはずが……ない。」（ワルド）

「アハハハハ！！なんかワルドさんが落ち込んでるんですけど、それはあの化けもん……烈風さんが力をワルド以下に落として戦っていたって感じですね。あの人も一応大人で、主人公はまだ……何歳だっけ？たぶん5歳くらい？なので本気はさすがに出さなかつたんじゃないですかね。あの鬼畜でも……ってありやいや。ワルドがいない……あれ？公爵夫人！！こ、こ、こんなところで会うなんて……。」（作者）

「オホホホ陰口はいけませんね。ちょっと拷問……じゃなくて教育が必要みたい。」（カリン）

「あ、作者が引きずられてる……おや？カリン様が杖w『ぎゃああああああああああああああああああああああああああああ』（作者）……気を取り直して5つ目！！

主人公は転生者で戦い方などを分ってるはずなのに……。あ、作者いないしどうしよう……あ、そうだ。ちよつと！ラルナ君！ちよつと来て！」（ワルド）

「なんすか？」（ラルナ）

「転生してきたのになんで弱いのか？」（ワルド）

「……作者に聞け。」（ラルナ）

「あ……行っちゃった。」(ワルド)

「ああ……ワルド君……俺はもう無理だ。」(作者)

「しつかりしてください。そして、主人公は転生者なのである程度戦い方について知ってるんじゃないですか？」(ワルド)

「ああ、それね。それはね、主人公は転生前、たいして喧嘩もせず、争いごととかそんなことやってこなかったのね。それで弱いんだと思うよ。」(作者)

「なぜ思う？さて六つ目……あれ？もうないですね。」(ワルド)

「え？マジで？そっか、もうお別れなんだね。」(作者)

「みたいですね。あ、そろそろ仕事なんで、さよなら。」(ワルド)

「さよなら。」(作者)

「ふう、みんないなくなった……そして質問も、もうないので、お礼とか書かせてもらいましょう。」

感想ありがとうございます。ほんと励みになります、悪い所とか意味不明なところを見つけたら是非指摘をお願いします。え？作者が読み返して？いやいや、それは……めんど……じゃなくって忙しいんです！（嘘）そしてpvとやらが累計2万越えですね、嬉しいです。そしてユニークっていうのが累計5千越えていますね、

そしてお気に入りも20件くらい。そして評価をしてくれる人もいます。こんな小説に興味を持って見てくれる人、お気に入りになってくれた方、ほんとにありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。では、また次話で会いましょう。しかしカリンさん、あなたとはもう会いたくない。」（作者）

「オホホホ、心配する必要なんてないですよ。もう、あなたがみなさんと会うことはないですから。」（カリン）

「え？」（作者）

読み返して思いました、何これつまらん。

では次話で。

一週間！？（前書き）

今回、携帯だと読みにくいですね。

一週間!?

Side エフリート

すぐに逃げることもできた。私は転生者、人……ではないけど、ありえない力だってもってる。

でも、何故だが、あいつが来るような気がして、私は動かないでいた。

私は死なない。

だから、早く助けに来いよ、吟。

暗い部屋で独り、エフリートは瞼を閉じた。

-----  
-----  
-----

『一週間。一週間じゃ。一週間で坊主を強くして見せる。』

「本当に?」

『わしはあんまり嘘をつかないと言われてるといいな。』

修行と言つ名の地獄を、ラルナは味わうことになることも知らず。

「ふん。よろしく」

と言ってしまった。

Side 爺

わしは目の前にいる坊主を見る・・・さっきとは違い、今は女の子の姿だが。コモンマジック苦手ということ以外、普通の貴族の子供。精霊に好かれる体質みたいじゃし、精霊の力も使う・・・と思う。

さっきも言ったがこの子供はコモンマジックを使うのが、H E T A。系統魔法は、風と土はライン、それ以外はドットと言ったところじゃ。摩訶不思議。

「爺！考えしていると死ぬぞ〜。」

坊主が詠唱を始める。坊主は『エア・ニードル』を儂に向かって放つが

「それは無駄だと何度言った。」

勿論、儂はカウンターではじき返す。卑怯？こいつを強くするためだ。だから坊主には、能力使用禁止令をだしている。

「糞っ！！！」

坊主は自分のエア・ニードルをかわしながら詠唱。

そろそろ儂から行った方がいいのかな？

そう考え僕は坊主との間合いを詰め、手刀で坊主の手首を折り、杖を落とさせる。そのまま、裏拳を繰り出すと、僕の手は坊主の胸に吸い込まれるように向かい、そのまま、坊主を吹っ飛ばした。

「フオフオフオ、精霊の力を使わねば、僕を倒せん！」

「へへ、そっか。クツクツ。」

む？坊主が笑った。胸骨は折ってやった、息をするのも辛い筈だ・・・人間なら。

「お言葉に甘えてやるよ。」

次の瞬間、坊主のが僕の視界から消えた。

「死ね！爺！！」

坊主はいつの間にか僕の後ろに回りこんでいて、僕に向かってエア・ハンマーを繰り出す、もちろんそんな火力じゃカウンターを破ることも出来る筈もない。坊主の体が弧を描きながら地面に落ちる。

「今の魔法、虚無・・・ではなかったな。」

「ああ、そんな便利なものでもねえよ、あれだ。NARUTの避雷針の術？だっただっけか、あれみたいな感じでよ。マーキングしたところに移動できる、魔法だ。」

「ほう、なるほど。分らん。」

きつと魔法と精霊の力を組み込んだものなのだろう。普通はそんなことは出来ない筈。

四系統魔法は人の意志によって世の理を変える魔法であるのに対し、先住魔法は自然界に存在する精霊の力を借りて世の理に沿った効果を発揮する魔法である。以上、wikiより引用。

だそうだ。それにしても、それを組み合わせなんて、坊主には才能があるな。

「考え事をしてたら死ぬぞ!!!」

坊主が詠唱を始める。あれ?そういや、こやつ、いつの間に杖を拾った?

まあいいや、そろそろ防ぐのは飽きた。攻撃じゃ攻撃!

「儂も暴れるぞう?」

儂の元に精霊が集まるのを感じる。

「ほぐれ。」

儂は目の前に巨大な炎球を作り出す。

「ちょ、やり過ぎだ!!!」

坊主があわててるの。

「お、聞こえんの、やり過ぎとか聞こえんの、歳かもしれんんの

うゝ。」

僕は、坊主に年寄りと言われたことを、実は根に持ってる。

-----

Side ラルナ

あの爺……絶対俺が「年寄り!!」って言ったことを根に持ってやがる。修業を始める前に言っちゃまったんだよね、後で謝ろう。そんなことより、今は炎球（命の危機）をどうにかしなけりゃならん

「土の精霊……俺に力、貸してくれよな？」

能力が使えない、俺のしってる魔法じゃあのトラック大の炎球は消せない。相殺なんて不可能。だから俺は魔法と精霊の力を組み合わせ、新しい何かを作らないといけない。

「あの世で僕に年寄りと言ったことを後悔しろ!!」

（やっぱり根に持ってたのか!!）

「えいつ!!」

爺が炎球を放つ。

俺は詠唱を終える。俺が使ったのは、あれだ。重力を操作したりできる奴。イメージは重力の玉が炎の熱などの力を捻じ曲げる感じ。俺の杖の先の景色が歪む。光を捻じ曲げる程の力場が作り出される。

「頼む！！」

俺は重力球にすべてを託し、放つ。炎の球と、重力球がぶつかる。炎球が無理やり曲げられ、俺に当たらず飛んで行き、後ろに巨大なクレーターが出来る。

うん、「えいつ！！」とかいうかけ声に合わない威力。なんとかそらすことに成功したようだ。やっぱ重力は土なのかな。

「フオフオフオ。なかなかやるのう。じゃが俺に攻撃できないようじゃ、エフリートを助けられん。」

「うっせ。」

俺はアースウォールと唱え、土の壁を作る。それから錬金をして、不純物たっぷりの鉄に変える。

「そんな薄い壁じゃ！俺の怒りを止められん！！」

鉄の壁は無残にも粉碎される。

どうやったのか分からないが鉄の破片を磁気を使って集める。どうせ精霊の力だろ。

炎で鉄の塊を溶かし、水で固める。割れる？そんなことを考えられるほど俺は賢くない。

ここまで来たらだいたい分るだろう。レールガンだ。鉄の塊に精霊の力を組み込んだライトニングを放つ。

なんということでしょう。赤っぱい何かが爺の横を通り抜けると、すさまじい轟音。

「あ、やべ。」

爺無傷だ、当たってないのだから当然。だが、爺の後ろの森、つまり、俺が放ったレールガンが飛んで行った方向に、爺の仲間はいる。

「あいつら、まあ俺の仲間じゃし、大丈夫だろ。」

いやいや、俺に負けてるんですよ？この爺は規格外だ。アクセラレータを使っても勝てるかどうか不明だ。

爺の仲間の吸血鬼と俺が戦っているのを知っていたが、面白そうだから見学してたそうさ。

そして、アクセラレータの反射能力に気付き、対策も考えたそうさ。多分、寸止めなんだろうな。もしかしたら、あのカリンも……いや、考え過ぎだろう。

「おゝい、気を付けろ。」

爺はニコニコしながら叫び。

「はあ？」

俺は間抜けな声を漏らしたとき。

俺の体に電撃が走った。

---

---

S i d e 爺

やり過ぎか？坊主に向かって雷を落としただけなんだが ーこれ重要。

「大丈夫か？」

返事がないただ気絶しているようだ。坊主の体の状態を見るが、致命傷を負っているようだ。

「うおゝ、火傷とか酷いな。ほい。」

儂が一瞬でラルナの体は傷一つなくなる。

「起きるまで待つか。」

今は生きているか分からない仲間の元へとかけだした。

一週間！？（後書き）

スリープクラウドで眠るのは・・・不自然ですね。いや、分つてたよ？別に知らなかったりなんてそんなことはないんだかね／＼さて、11部目になったりしました。指摘ありがとうございます。

勉強しないと。いけないな。さて、ストック、どうしたもんでしょうね。もし、ストックに追いついたりしたら更新速度を、もともと遅いのですが、さらに遅くなったりすると思います。

まだまだ先の見えない、まるで俺の人生のような小説ですが、これからもよろしく願います。

え？何？（前書き）

エフリートを助けるために、戦うことも考えました。

書こうとしたら全然進まないんで、OHANASHIで解決させることにしました。

今回会話しかないな。

そして今回意味不明です！見逃してくれ！悪気はあったんだけど！罪は認めてるんだ！

え？何？

Side ラルナ

あ、あれから1週間たったんだぜ。いや、本当に大変だったぜ。

修行とか

鍛錬とか

訓練とか

で、だな。吸血鬼の皆さんは少し暴れてます。

何故？いや、そりゃね。仲間が攫われたんだし、暴れたくなるですよ。

マザリーニとかいう人いたっけか。その人ってアンリエッタよりも頭よかったよな。何故、吸血鬼を殺そうとする。

わざわざ吸血鬼が国から出て行き、他の国にで暴れてくれるんだから、助かるでしょ。この国弱いし。

多分・・・俺の予想では、アルビオンに行かれるとウエールズだとかが困るから、みたいなアンリエッタの命令かもね。哀れだね。こうやって彼はどんどん痩せてくんだ。

あ、俺の領は襲われない筈・・・頼んだし。

さて、そろそろ行かせてもらいましょう。

（7時間後）

『ふうん、ここがお城か。』

『おや？門が閉まつてる。困ったな〜』

『ああ、そうだ。俺の力を使っちゃえば入れるじゃん!!!』

ああ、どうも、ラルナです。今は俺の独り言を聞けば分ると思います。

いや〜、城って結構でかいね。見た時は、驚いたよ。

え？国境付近からどうやって？そんなの決まつてるじゃないか！レポートでもしたと思ってよ。

学園都市の風紀委員になつたりなんかしたら演算できなくて地面に突っ込むのが目に見えてるからね。ポケモンにならせてもらいましたよ。え？ポケモンのレポートは一度行ったことのある場所に行けないって？……もちろん俺の屋敷近くに飛んでからの移動ですよ。

さて、と。

『こんな門なかった。』

おお、門が消えちゃったよ。いや〜チートだなこりゃ。

「誰だ!!!」

『君こそ誰だい?』

『普通は自分から名乗るものだと僕は思ってるけど』

「私の名は、アニエス・シュヴァリエ・ド・ミラン。お前は、何者だ?」

まあ知ってたけど、復讐者アニエスさんじゃないか。

『へー、そうなんだ。俺の名前？いやいやどうせ忘れちゃうから聞かなくてもいいよ。』

「そうか。」

あり？この人全く構えない。何故？

『俺は襲ってくるものだと思ってたよ。何故？』

「今の力は、なんだ？」

今さら身構えるアニエスさん。

『ふーん、警戒してたんだ。気にしなくていいよ。マザリーニ君に会いに来ただけだよ。』

「……………」

あれ？黙ってるってことは「どうぞ通ってください」って言うってことだよな？俺が歩き出し、アニエスさんの横を通ろうとしたとき、人間離れた動きで俺に切りかかってきたじゃないか！

が、あの化けも……あの爺様に鍛えてもらった俺は剣をかわし、杖を構える。

『うーん、困ったな、興奮すると人を切ってしまうなんて、別に俺はアニエスさんのことは嫌いではないかもしれないが、そういうプレイは嫌いなんだよね。』

「な、そんな訳ないだろ！！！」

ありや、顔を真っ赤にして照れちゃってるよこの人。

「照れてなどいない！」

ありや、心が読まれてるな。しかたがないね。

『しかたがない、そんなに興奮してるなら仕方がないね、今夜だけ付き合っただけよ。』

『ただし、俺が苛めるんだけどね』

「やれるものなら。」

『そつか、戦う前に、俺の力の種明かしでもしようかな。』

『すべて現実を虚構にする、それが俺の大嘘憑き（オールフィクション）だ』

ドヤッ。

ボケっとしているアニメスさん

ドヤッ。

ボケっとしているアニメスさん

ドヤッ。

ボケっとしているアニメスさん

・・・あれ？なんか無視されてる？まあ都合いいや。

俺に関する記憶を『なかったこと』にして、今、王室っぽいところを探しています。

『いや〜、何処に居るのかな〜。』

「誰だ！」

あれ？この声、さっき聞いたよな。後ろを振り向くとアニエスさん。エンカウント率高っ！！。

『あれ〜、君はアニエスさんじゃないか！ダングルテールで会ったのが最後だったね。元気にしたみたいじゃないか。』

「お前、誰だ？」

おお、さっきと態度が違うじゃないか！

『いや〜、覚えてないか、君と同じ、復讐のためにここに来ただけだよ。』

まあ間違えじゃないね。

「でも！あそこの生き残りは……。それにお前はまだ子供じゃないか！」

今さら気付いたのかよ。

『話さなかったけ？俺の悩みは背が伸びないこと、そして結局伸びずに二十歳を迎えてしまったって、まあ、その話と、今の話は別だ』

よ。マザリーニ君に合わせてくれると嬉しいな。』

ずっと黙っているアニエスさん。あれ？もしかして怒ってる？そうだよな。こんなバレバレな嘘を信じる訳が「分った、ついてこい。」へ？……………

と、とりあえずついて行こう。それからしばらく。ブツブツとなんか呟きながら俺を案内している。よく騙されましたね。さすがです！アニエスが突然立ち止まり。

「ここだが。」

おお、どうやらここがマザリーニ君の部屋？あれ？この人の部屋なんてあったの？

「名前を聞いてもいいか？」

『ん？ああ、いいよ。俺の名前はギンだよ。忘れたかい？』

「ギ、ギン？」

ああ、困ってますね。まあどうでもいいや。

『じゃあ俺はマザリーニ君とOHANASHIしてくるから。』

「ああ。」

スタコラと歩いてくアニエスさん。……………まあいつか。

立派な扉だけど、ちょっと邪魔だね。うん、もうちょっと開放的な方がいい。

『こんな扉なかった』

扉が消えて、なにやら俯いて、ものすごく大変そうなお方がいらっしやる。

『あの〜、マザリーニ君！！吸血鬼の代表の代わりに挨拶に来ただけだ』

「え！ちよ、ま。」

あわてるマザリーニ君。

『あ〜、大丈夫、怪我はさせないから。質問があるんだけど。』

「な、なんだ？」

痩せている枢機卿を見下ろしている形で俺はとりあえず。

『う〜ん、確かに吸血鬼は暴れまくってて困ると思うんだ。その危ない吸血鬼が他の国で暴れてくれるのになんでわざわざ殺そうとするのかな？』

「ああ、それか。それは別に私が決めたことじゃない。」

困ったように笑うマザリーニ君。彼も相当疲れてるようだ。

「困った肩がいてな

『ふ〜ん。その人、恋人が他国にでもいるの？』

「・・・そうらしい。」

『ふうん、じゃあ攫われた吸血鬼は攫わせてもらっよ。ついでに、吸血鬼たちは・・・ゲルマニアでいい?』

「ああ、そうしていてくれ。」

ホツとしたように言うマザリーニ。

『よかったね。仲間の吸血鬼と戦争することになってたらこの国終わってたよ。』

「はははっ。」

『じゃあね、お礼はいらないよ。アニメス君によろしく。』

俺は痩せた枢機卿の部屋を出・・・ああ、エフリートを助けに行っただのは俺じゃないよ。あの爺だぜ。何故?それはだな。ワルドたちなら問題なかったんだが、どうやら監獄に烈風がいるらしい。あのかいb・・・あの伝説と戦おうなんて自殺するようなもんだ、と爺に言われたので、俺は国の方に『エフリート攫いますよ宣言』をしに来ただけです。

あの伝説がいなかったら俺が乗り込んでちょっとOHANASHIしに逝くだけだったのに・・・運がよかったですね、ワルド。

俺いらなくね?と思ったが、そんなことは口にはいけない。

そして、この後アニエスが消えたギンという男を探したりしてるなんてことは関係のない話。

え？何？（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

え、パソ禁指令が出たが俺には関係ない！フウハハハハハ！なぜなら！俺のことを待っている読者がいるのだから！と、くだらないことを言いましたが、あれですね、ラルナはいらな  
い子でした。

え、と、ほんととは監獄に向かってワルドと対決！！て感じのカッコイイ話にしようとしてたんですけど、かなり難しく、あ、そうだ、爺がいるじゃん。とか思っちゃったんですね。すいません、ほんとにすいません。  
いつか伝説を超えてほしいですね。

エフリートとラルナと一緒に旅させるんですが、旅での出来事とかは番外編で書きたい！いや、番外編で書く！と思ってるので、旅が終わり、屋敷に帰ってきたところからいきなりスタートになる予感が・・・いや、もうそうなることは決まっています！

と思うので、ほんとすいません  
こんな作者すいません。

気合い入れて逝きます！！あの世に！

誤字脱字などがあつたら教えてください。

## 9年後（前書き）

・・・アニエスさんがシュヴァリエだったり城で御仕事をしているのは、ミスじゃないです。  
すいません。

あと、今回は、一気に話が飛び、入学前まで一気に飛ぶぜ！  
そして、いきなりラルナに仲間が増えますが、どうやって出会った  
りしたのかは番外編で勝手に書かせてもらいます。  
その例の仲間様ですが、ファン、好きな人、ごめんなさい。  
自分でも書いててこんなキャラじゃないなと思いました。

## 9年後

Side ????

俺は、急いでいた。とにかく、急いでいた。

「畜生！！ラルナとエフリート・・・よくも俺に宿代を！！」

そう、俺の仲間ライバルで心の友のラルナとエフリートを追っていた。

まだ、朝飯も食べてないのに。

状況が分らないと思うが、今はトリスティンの Heim 領にいる。Heim 領はラルナの親が治めている土地らしい。

『約5、6歳の時、パーティーのついでで旅に出て、それからだいたい9年で今に至る』とラルナが言っていた。

そして、俺の名前はルーク・フォン・ファブレ。エルフだけ！

エルフがこんなところにいるのはおかしいと思ってたりするんだが、何故かラルナが持っていたマジックアイテムで、耳の形を変えている御蔭でラルナ達と旅ができています。

俺と、ラルナ達の出会い・・・あれは、4年前だったな。

「じゃ、なくて！とりあえず、追いつかないと！！」

Side エフリート

そろそろ、あいつも起きたかな。

「ラルナー！！エフリート！！」

予想より1、2時間早かった。  
腰に届いている赤い髪、服は……ラルナ曰く『ゲームと同じ』  
らしい、長剣の腕が凄かったりするが、昨日と同じ服を着ている。  
いや、毎日あの服だ。本人は同じものを3着持っていて、着まわし  
ているそうだ。  
そんなこと考えてたら、追いついたか。

「お前ら！金出せ！金！」

「いやだ。」

「……………」

上から、ルーク、私、ラルナ。

「あれ？また格好というか、姿が変わってるな。ラルナ。」

話題を変えるルーク

こいつ（ルーク）はラルナの事に煩い。

コクリと頷くラルナ。

何故、今返事をしないのかルークは知らない。とりあえず、今の姿  
のラルナは喋ると危ない。

長い銀髪、プレートアーマーにガントレット。あとは私服。

ラルナは『これゾン』の『ユー』というキャラクターになっている  
らしい。

ラルナの能力は使用すると経験値的な何かが溜まってレベルが上が  
るらしい。

今は、他人に変身、その人の装備、能力をそのままコピーできる。

勿論、元の姿に戻ると装備や能力は消えてしまう。

とりあえず、無視されてると勘違いして、落ち込んでいるルークに教えなければ。

「ルーク、今のラルナは話せない。勿論能力的な意味でだ。」

「そつかあ、無視されてるんじゃないのか、よかった。」

安心してお金のことを忘れていているルークを放置してラルナの家に向かい、たいんだけどな。

なんかラルナがルークに渡してるよ。

「え？これ俺の？」

コクコク。

「え？着けていい？」

コクコク。

「おお、ピッタリだな。」

何を上げたのか気になる、後でルークに聞かないとな。

「え？これ、ラルナも持ってるのか？」

コクコク。

な、なんだってー！いつの間に！ラルナとルークは・・・いや、きつとラルナにも考えがあったることだ。そうに違いない。

聞いてみよう。

「ねえ、ラルナ。その指輪、マジックアイテムどんな効果？」

「マジックアイテムこんな指輪。」

笑顔でラルナは返事をした。

「あれ？喋ってよかったの？喋ると頭が痛くなるって聞いた」「ぎゃああああああああああああ！」「あ、そついつこと。」  
叫び声の主、ルークが頭を抱えながら悶え苦しむ。  
どんな理屈が分からないが、痛みなどをペアに押しつけるような物らしい。

「成功するとは思わなかった。」

だそうだ。

もし、ルークに違う意味で渡していたら・・・ルークに消えてもらうしかなかった。よかったねルーク。

そして、ラルナの贈り物には気をつけよう。

Side ラルナ

朝から騒がしい。

テュリユークさん、ルークは、元気だぜ。もうすぐ家だし言つとこつ！

「そろそろ家が見えてくるはずだよ。」

あとルーク、そんな目で俺を見るな。

「おう。」

頭を抱えているルーク。

「では急ぎましょう、お嬢様。」

。。。。。

「エフリート？」

「何でしょうか、お嬢様。」

「何故敬語？」

「。。。。私たちの設定は？」

「あつ。。。。。」

そうだった。ルークは俺のボディガード。エフリートは世話係的な人。という設定だった。

「忘れてた。じゃあ行こうか。」

「おう！」

「はい。」

人の前では敬語っぽい言葉使いにするらしい。

しばらく歩くと、屋敷が見えてくる。

「俺はあそこで生まれたのか。」

あそこには黒歴史が詰まっている。ルークは頭を押さえているが全然関係ないからな。

扉の前、何故だ、何故緊張しているんだ俺は、何を恐れている。そうだ、母上とは時々手紙を送りあったりしたじゃないか。そうだ。ここは俺の家なんだ。深呼吸だ、素数を数える。

「2, 3, 5, 7, 11, 13, 17, 19, 23, 29, 31, 37, 41, 43, 47, 53, 59, 61, 67, 71, 73, 79, 83, 89, 97.....」

よし、落ちつけない。

「早くしてください。」

急かさないでくれエフリート。

俺がドアノブを掴んだり離したりしていると、エフリートが扉を開け、俺をつきとばしやがった。

くそお、床に鼻ぶつけた・・・痛い痛い。鼻を擦りながら立つ、いつもならここで喧嘩するのだが。

「ラ、ラルナ？」

懐かしい声で頭が冷めた。俺が旅に出る前と全く変わっていない母がいた。

あ、やべ、変化解いてない。

「母上？」

「ラルナアアア！！」

母上は階段を駆け下り、俺に向かってダイブ！！

「ちよ、母上！落ちついて。」

「落ちついてるよラルナアア！！」

いや、落ちついてないだろ。そして抱きつくな。

「痛いです！痛いです！息ができません・・・あ、今ポキッってポキッって鳴りました！！」

解放され、急いで息をする。

「心配したのよ？」

「すみません。」

先住魔法を使えば、相手が嘘を吐いてるか分かる。

本当に母上は俺を心配していたらしい。

それからいろんなことを兄と母上にお話したよ。兄が学園でどうだったかなどを聞いたり、母のことも、俺の旅のことも話した。(ルークとエフリースの正体などは省いた。)

「旅で疲れたのかも。もう眠いや。」

と言って、話を強制的に終わらせ、懐かしい自室に向かう。使用人たちからのお帰りなさいを聞きながら自室に入り、そのままベッドに潜り込む。

しばらくして、何かが部屋に入る音で目が覚めた。薄目を開けると、明りのない部屋は異様に暗く。静かだった。侵入者がいなければ普通の夜。

「だれ？」

声をかけると侵入者は立ち止まる。

「ラルナ、起きてたのか。・・・ああ、ビビった。」

「ああ、兄様だったか。」

声の主は兄。夜中に妹の部屋に入り込むのは変態がすることだぞ。勘違いされないように気をつけてほしい。

「ラルナ、頼みがある。」

「なに？」

「俺のことはお兄ちゃんと呼んでほしい。」

訂正する。こいつはHENTAIだ。

「無理、変態。」

「グハア!!」

兄、もとい変態は床に膝をつける。

「変態は部屋から出て言ってください。」

「うわ~~~~~ん!!」

泣きながら出て行ったよHENTAI。全く、俺がない間この家はどうなった。

まあいい、兎に角寝なければ。

おやすみっす。

## 9年後（後書き）

読んでもらえた。

読者が増えるよ！やったん・・・自重しましょう

誤字脱字などがあつたら教えてください。

いやゝ、9年もすりゃ人は変わる。

ルークは、なんというか、これから頑張っで欲しいです。

エフリートの能力は後々、アニエスさんのこととかも、後々。

では次話で

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4133v/>

---

ゼロの使い魔と、癒しの転生者。

2011年8月20日22時21分発行